

日中姉妹都市間交流活動の変遷の考察
秋田市と蘭州市の交流活動を事例として

秋田大学教育文化学部

馮明子涵

指導教員：市嶋典子 先生

目次

はじめに	3
秋田と蘭州の交流の考察	4
1. 秋田と蘭州間交流頻度の変遷	4
1.2 秋田と蘭州との交流方向の偏り	5
1.3 調査結果から浮かび上がる問題	6
2. 2009 年から日中世論調査の分析	6
2.1 2009 年日中世論調査分析	6
2.2 2011 年日中世論調査分析	7
2.3 2013 年日中世論調査分析	8
2.4 2019 年日中世論調査分析	8
2.5 2009 以来の日中世論調査結果を見る	9
3. インタビュー調査	10
3.1、インタビュー対象者と選択理由	10
3.2、インタビュー方法	10
3.3、インタビュー内容と分析	11
4. 結論	14
添付	15
参考文献	26

はじめに

日中両国は、過去から一衣帯水の隣邦関係で繋いでいる。政治、経済及び科学技術などの発展とともに、情勢が変化しつつある国際社会において、日中両国間の協力発展が一層重要視されている。両国の相互協力を深化し、友好交流を推進するため、両国民の相互の見方を把握し、積極的な見方を作成するように協力することが重要だと考えられている。しかし、日本の言論 NPO と中国国際出版集団が行った「第十五回日中共同世論調査」の結果から見ると、両国民間の認識はいい方向に発展しているとは言えない。

「日中共同世論調査」は、日本の言論 NPO と中国国際出版集団が 2005 年から毎年継続的に行われている、日中両国民の相互認識状況と変化を把握することを目的とした調査である。2019 年に公表された「第十五回日中共同世論調査」の結果によると、現在中国に良い印象を持つ日本国民はわずかな 15.0% で、悪い印象を持つのは 84.7% 占めている。それに対して、日本に良い印象を持つ中国国民は 45.9% であり、悪い印象を持つのは 52.7% 占めている。このデータから見ると、中国から日本へのイメージはマイナスとプラス各半分ほどだったが、日本から中国に対する評価は確実にマイナスが圧倒的である。この現状において、日中間の民間交流が重要視されている。「国と国同士の関係では、お互いの利益がぶつかるのだから、なかなか解決できない問題は必ず生じてしまうだろう。それでも何とか解決しなければならないといったときにこそ、民間交流、今なら、国家レベルとは違った交流ができる地域間交流が力を発揮するのである。」自治体国際化フォーラム（日中地域間交流と歩み 南村 P.6¹）ここで、筆者は民間交流に大きく影響を及ぼした両国間「姉妹都市」の締結を注目した。

姉妹都市提携の概念について、確立された定義があるわけではない。自治体の国際提携の支援を業務の一つとしている財団法人自治体国際化協会による統計上の定義を参照すると、以下三つの条件が揃えるのが必要だと考えられる。

両首長による提携書があること

交流分野が特定のものに限られないこと

交流するにあたって、何らかの予算措置が必要になるものと考えられること

言い換えれば、「公的で包括的な財政負担を伴う交流関係」なのである。豊田哲也（「姉妹都市提携の変容と展望」 P.10²）

筆者の出身地の中国甘肅省蘭州市は、秋田市と昭和 55 年（1980 年）から姉妹都市を提携し、互いの交流活動を今まで 40 年間も中断せずに開催し続けてきた。筆者が蘭州にいた時も、自分が身につけた日本語の知識を生かして、活動に協力したことがある。そのうち、筆者は中国人の立場に立ち、姉妹都市の秋田の人々から親切さを感じた。逆に考えると、日本側の印象を改善す

¹ 南村 2013 年

² 豊田 2016 年

るには、「姉妹都市」も重要な媒介として、効果を発揮する可能性がある。

本研究では、かつて秋田と蘭州の交流活動を日中共同世論調査の結果と合わせて考査し、姉妹都市間の活動が相手にどのように影響を与えているのかを分析する。主にかつてホームページに掲載された活動記録を調査し、半構造化インタビューを分析し、今後の姉妹都市間の交流活動に建言を試みるのが目的である

今迄秋田と蘭州の交流考察

1. 秋田と蘭州間交流頻度の変遷

1972年日中両国が外交関係を樹立し、戦争で崩壊した日中関係がとうとう積極的な方向に沿い、発展した。1979年、「日中文化交流協定」が結ばれ、日中両国人民間の文化交流が始まった。1980年、秋田市議会議員訪中団7名が北京の中日友好協会を訪れ、秋田市と蘭州市が友好関係を締結した。(秋田市公式サイト 主な交流(蘭州市)³2020年10月6日に取得)

それ以来、秋田と蘭州の民間交流が続々に開催され、今まで中絶したことはない。ここで、筆者は長年に続いた両地の交流活動に対し、日中両国の多様で不可避な抵抗と摩擦の影響を考えながら、秋田県庁から手に入れたデータを参考に表1に作成し考査を行った。その結果、1980年から今まで、蘭州から秋田への訪問、公演、研究員の派遣などの交流活動は

交流実績		友好	教育・青:文化	スポーツ	技術	経済	合計
蘭州市→秋田市	件数	25	4	15	4	48	99
	延べ人数	143	70	218	58	173	670
秋田市→蘭州市	件数	31	4	16	14	20	91
	延べ人数	717+	41	109	111+	76	1086+

表1 秋田市と蘭州市交流実績

99回あり、秋田からの交流は91回である。そして、秋田地方新聞の「秋田魁新報」に登載された蘭州に関する記事を参考にすると、2010年に蘭州での反日デモと2013年二度延期された友好30年式典の開催が、近年秋田と蘭州の交流経歴で特別な意味を持つ事項になっている。なので、この2つの事項を主なシンボルとして、二つの時点前後両地の交流を考査した。その結果2010年前蘭州からの交流活動は82回あり、秋田からは84回であった。2010年から2013年まで、蘭州からは5回、秋田からは2回、今迄大きな差は出ていなかった。しかし2013年から2019年までになると、蘭州からの交流は14回で、秋田からは5回しかなかった。しかも五回の交流で二回は提携35周年の事業、一回は友好交流合意書の満了が原因になる。相手の姉妹都市から続々と訪問団体を派遣しているのに、秋田市からの訪問団体派遣の中止を不自然に感じている。ここで2013以後に、秋田から蘭州への交流減少の原因は重要視される。歴史を回顧するうえで、筆

³ 秋田市「交流の経緯」2020年

者が中国での経験と共に考えると、田中淳仁が「日中地域間交流のあゆみと展望」で提示した、2010年以來2012年に最高潮を迎えた中日間尖閣諸島問題に起こった中国人民の反日情緒を考慮の中に入れておく。

1.2 秋田と蘭州との交流方向の偏り

秋田と蘭州両市は異なる文化背景と社会発展状況において、交流活動を推進するうちに、偏っている方向も違ふと筆者は考えた。それで、筆者は過去の交流活動を考査し、以下の内容にまとめた。

秋田県庁のデータにより、1980年以來、蘭州から秋田に一番頻繁に派遣されているのは技術交流員であり、秋田で水道技術、医療技術など技術面の交流を48回行った。その次は友好交流派遣で、蘭州から25回の派遣があった。回数が三番目になるのは太極拳教授、歌劇の演出などの文化交流の派遣で、15回行った。文化交流に派遣された人数が218人であり、友好交流の143人と技術交流の173人より上回っている。ほかに学生を主体とする教育、青少年間の交流派遣は4回、サッカー試合などのスポーツの交流派遣は4回、経済の交流派遣は一回である。以上のデータを見ると、秋田との技術面の交流は最も蘭州に重視されていることが分かる。その次に、両市が文化面での交流と友好促進の交流が非常に重視されている。ほかの教育、青少年、スポーツ、経済の面での交流はあまり重視されていないことが分かる。逆に秋田の方から見ると、友好面での交流が圧倒的に多く、31回の交流派遣で、延べ人数が717人以上達している。その次に多いのは技術交流団と技術指導員の技術面の交流派遣で、20回行った。文化面とスポーツについての派遣は同じぐらいで、各16回、14回行った。残り教育・青少年、経済面での交流は少なく、各4回と6回である。このデータをまとめて見ると、秋田で蘭州との友好交流が最も重視されていることが分かる。しかも1980年以來蘭州に派遣した1086人の中に、約七割が友好交流の活動に参加した経験があることが分かる。このことから秋田市で蘭州と友好交流を続けるための礎ができていると考えられる。さらに問題を発見するために、筆者は県庁からもらった姉妹都市間の活動パンフレットと「魁新報」より、暦年の「友好交流」の内容を調べた。しかし、蘭州からの友好交流は主に県庁への表敬訪問などが記載されていたが、秋田から派遣した友好交流団の情報はほとんどなかった。そのため、ここで友好交流をほかの面と明確に区別し難い。このことから見ると、蘭州から交流してきた県民に地元で経験を共有することと秋田県民への宣伝が一つのポイントになる可能性が残る。蘭州市と秋田市のデータを比べてみると、秋田蘭州両市とも互いの交流を重視し、相手の文化を学ぶために研修員を派遣している。しかし、両方とも大人の交流を主要として、青少年の交流はわりと少ない。技術の面で、蘭州市は積極的に秋田の技術、特に医療技術と水道技術を学んでいる。秋田が技術上蘭州を指導する位置にあると考えられる。ここで、2013年以後秋田からの交流減少の原因について、蘭州市内技術の発展も考慮の中に入

れておく。

1.3 調査結果から浮かび上がる問題

秋田と蘭州の交流歴史を踏まえると、このような結果を得た。1980年から2010年まで両市の交流事業は大きな波動がなく順調に進んできたが、2010年に尖閣諸島問題の発酵と共に、蘭州市の反日情緒が高まり、その後秋田から蘭州への訪問回数もだんだん減少してきた。重要となる点はこの2010年以後秋田からの訪問減少にあり、その原因は今後の交流事業に影響する大きな要素となる。2010年から2013年前後蘭州に行かなくなる原因はその頃の国際関係を考えたうえ、身の安全のための決定ならば納得できる。そうするとさらに問題になるのは、尖閣諸島の騒動がおさまった情勢の下に、なぜ蘭州への訪問派遣は停止のままだろうか。ここで、秋田民衆により深層な問題があると推測する。具体的に、それは蘭州の反日デモに対する失望か、それとも日中関係の重要性を感じなくなり、交流事業どうなってもいいという考えか、いまだに分からない。もし国際情勢などより深層の問題が存在すると、尖閣諸島問題はただその問題を触発したきっかけに過ぎない。例えば互いの交流が正常に戻ったとしても、県民の心底で中国に対する嫌悪の感情を抱いたり中国から魅力を感じなかったりすると、いずれ再び何かに触発されて、互いの交流が正常に戻るものが至難な問題となる。

2. 2009年から日中世論調査の分析

本稿では、過去秋田と蘭州が交流する両国民間イメージの背景に注目して、分析を行う。そのために、2009年、2011年、2013年と2019年の日中世論調査の結果を分析する。前文で述べたとおり、両市の交流事業に影響する主な要素として2010年頃に影響を広げていた尖閣諸島問題が注目される。そのため、尖閣諸島問題の影響が拡大する前（2009年）尖閣諸島問題の影響が拡大している最中（2010年）延期された35周年式典の再開（2013年）と現在（2019年）を注目し、考察を行い分析する。

2.1 2009年日中世論調査分析⁴

2010年以後秋田と蘭州市が互いに交流頻度に変化した原因を探る前に、2010年前後の日中両国民の互いのイメージを見てもらう。2009年の第五回日中共同世論を見ると、まず、相手国を知る主な手段について、「自国のニュースメディア」と答えた日本人が92.5%となり、自国のメディア情報により相手国の印象を形成していることが分かる。そして、日本人の中国に対する印象は、「どちらといえば良くない」と「良くない」を答えた人は73.2%となる。中国に対する印

⁴ 「第五回日中共同世論調査」 <https://www.genron-npo.net/world/archives/6489.html>

象はまだマイナスの方が上回っているが、昨年（2008年）（75.6%）より改善している傾向が見える。当時の日本ニュースメディアが、両国の情報媒介として、主にマイナスな見方を日本で拡散させたが、過去よりポジティブの内容も増加したと推測する。次に、「相手国に行きたいかどうかとその理由」の部分で、日本人の54.9%が中国に行きたいと答え、「行きたくない」の44.8%を上回った。中国に行きたくない理由で最も多いのは「安全、衛生上の問題があり安心できななお00いから」の71.7%で、「渡航するうえでの魅力を感じないから」が42.2%で続いた。（しかし、日本の有識者と中国の学生では、ともに相手国に「行きたい」が8割を超えている。このことから、一般日本民衆の中国への渡航動機を作ることが可能だと判断できる。）今後、積極的に交流を進めるべきと考える分野では、日本人で最も多いのは「文化面での民間交流」の36.6%で、「民間企業間での人材交流」の27.4%、「留学生の受け入れ」の26.1%が続いた。中国では、「文化面での民間交流」の48.9%が最も多く、「教員・教育関係者間の交流」と「学者・研究者間の交流」がそれぞれ40.6%と40.3%で続いている。このような結果を得ると、日中両国間民間の有識者たちは、これからの日中関係をかなり重要視していることが分かる。この結果が出た上で、日中民間友好交流の礎ができていると考える。

2.2 2011年日中世論調査分析⁵

中国国内で反日デモが盛んでいた2010年から2011年までの期間を経験した日中両国民民間の見方を見てもらう。2011年に実施した「第七回日中共同世論調査比較結果」を見ると、中国に「良くない印象を持っている」と「どちらといえば良くない印象を持っている」と答えた日本人は78.3%となり、昨年（2010年）（72.0%）より急激に高まっている。日本人がマイナスイメージを抱く理由で、「尖閣諸島での漁船衝突の際の中国の対応」を挙げている日本人は六割を超え、「資源エネルギー、食料の確保などでの中国の行動」も増加している。そのうえ、相手国に「行きたくない」と思う日本人は53.3%となり、昨年（2010年）（46.9%）より増加している。行きたくない原因について、「安全、衛生上の問題で安心できない」が59.7%で依然と最も多く、「言葉が通じない」が32.5%、「魅力を感じないから」が38.3%で続いている。そして民間交流に関する日中両国民の意識を見ると、日本人は8割近くが、民間レベルでの人的交流は重要だと考えており、「文化交流」（27.8%）「留学生の受け入れ」（25.3%）「民間企業の人材交流」（24.2%）「メディア間の交流」（24.2%）に関心が高い。さらに、日中間が今後様々な分野で協力すべき、という考えに「同意」と答えた日本人は40.6%と最も多いが、昨年（2010年）（47.8%）より7ポイント程度減少している。このような結果が出ると、まず2009年以来日本人が中国に対するイメージが全体的に悪化していることが分かる。そのうえ、中国への渡航意願が減衰するこ

⁵ 「第七回日中共同世論調査比較結果」<http://www.genron-npo.net/world/archives/4165.html>

とが明瞭になる。さらに、日本民衆の間に、これからの日中間の交流が非常に重視されている。以上のように、日中関係が悪化しているが、日本民衆がこれからの日中関係を重要視していることが見えてくる。

2.3 2013年日中世論調査分析⁶

2013年に、二度と延期された秋田と蘭州市の友好30周年式典の開催をきっかけとし、筆者は尖閣諸島の騒動が一時安定したと推測し、当時の両国民の印象を見てみたいと考えた。2013年に公表した「第9回日中共同世論調査結果」では、日本人の中国に対する「良くない印象」は90.1%、逆に中国人は92.8%で、どちらでもこの調査が開始する以来最悪の状況になった。日本人が中国に「良くない印象」を持つ最も大きな理由は、「尖閣諸島を巡り対立が続いているから」で53.2%となる。そして、「相手国に行きたくない」と答えた日本人が69.5%となり、昨年(2012)(53.8%)より大幅に増加している。日中間の民間交流について、「重要」だと考えている日本人は約六割、昨年よりは減少している。そう答えた理由について、日本人は「相互理解の増進」を選ぶ人が多い。

このような結果を見ると、2013年に両国間互い反対の声が最高潮を迎えたとも言える。日本も中国も九割以上の人々が「関係が良くない」と答えた下で開催された秋田と蘭州市の30周年式典はどのように議論されたのかここで筆者の疑問となる。

2.4 2019年日中世論調査分析⁷

2010年から2013年までの衝撃を受け、日中関係はどう発展しているのか振り返ってみたいと考える。2013年より、中国人が日中関係に対して、「良くない」と答えた人が52.7%となり、半数減少した。しかし、日本で「良くない」と答えた人が8割を超えており、2013年より一割程度減少したが、日本で中国に対する印象は反対が多数のままということが分かる。相手国への訪問について、中国へ「行きたくない」と回答している日本人が七割近く、2013年以来大きく変化しなかったことがない。行きたい理由について、「景勝地や観光地への訪問」など観光に関する理由が一番挙げられている。両国間の民間交流について、「活発ではなかった」と答えた日本人が「活発だった」の人より二倍近く多い。そして、日中関係の発展や改善にとって「重要である」と考える日本人は六割を超えている。民間交流を進めるべき分野について、日本人では「文化交流」、

⁶ 「第九回日中共同世論調査結果」<http://www.genron-npo.net/world/archives/4911.html>

⁷ 「第十五回日中共同世論調査」<http://www.genron-npo.net/world/archives/7379.html>

「留学生の相互受け入れ」「民間対話」の順であり変化がない。そして、2019年の調査結果により、ある面白いことが見えてくる。日中両国民の情報源の調査で、日本人は中国や日中関係に関する情報源として、自国「日本のニュースメディア」を選ぶ人は圧倒的だったが、それに対して、自国のメディアが日中関係に「貢献している」と答えた日本人が26.9%に過ぎない。「何も貢献していない」、「逆に悪影響を与えている」と答えた日本人は33.8%となっている。しかも、日本で「メディアは客観的な報道をしていると思わない」と答えた人が30.5%占めていて、「そう思う」の人はわずかな14.9%である。この結果を見ると、多数の日本一般民衆は自国のメディアは日中友好に貢献していない、客観的な報道をしていないと判断している以上、それを主な情報源として中国と日中関係を認識していることが分かる。こうなると、日本で中国を認識できるメディア以外の手段を見つけたり、メディアの情報を客観的に個人の判断を下すことが重要だと考える

2.5 2009 以来の日中世論調査結果を見る

2009 から 2019 年までの十年間、日中関係が大きく変化したとは言える。時間の前後順位を沿って概括的に言うと、2009 年から 2013 年までの間に、尖閣諸島問題などの影響で、改善し始めた日中関係が悪化する一方であった。2013 年、日中両国が相手国に対する悪い印象がともに九割以上突破した。そのような最悪な期間で、蘭州と秋田の 30 周年式典が開催された。2013 年の後現在まで辿り着くと、中国国内での日本に対する反対の声が弱くなり、対して日本国内で中国への悪い印象は持続に八割以上超えている。日本国民が中国を認識するための手段について、日本国内では、中国と日中関係への認識がメディアに依存している。しかし、日中友好に貢献していなく、客観的な報道をしていないと思う人が大多数である。故に筆者は新たな中国を認識できる手段が必要だと考える。そのため、当地に向かい、当地の人と交流することが一番効率的で有効な手段だと考えたが、2009 年以来中国に行きたくないと答える日本人が年々増加していることにより簡易にできることではない。中国に行きたくない原因について、「医療、衛生の安全」「言葉が通じない」「魅力を感じない」などが日本で挙げられている。これは、秋田からの訪問派遣の減少原因を認識するには参考にもなると考える。筆者は中国で 20 年も生活してきた中国人として、中国の医療、衛生条件の改善を見ていた。しかも近年中国で日本アニメや J-POP の影響を受け若い世代で日本語学習ブームも生じ、これから日本人が中国への渡航について楽観的な態度をとっている。しかし、信憑性が高くない国のメディアに依存している日本国民たちが、中国を認識する情報源が限っているうえ、中国のことがそのまま伝えられることも困難だと考えた。故に、日本一般民衆の独立で、客観的な視点から自国メディアの報道を見ることが重要だと考える。日中関係の重要性について、日本ではずっと重要視されているが、近年そう考える人が七割から六割に減少し、これから日中関係の重要性を軽視するような恐れがある。交流の内容について、ほとんど変化したこともなく「文化交流」、「留学生の相互受け入れ」「民間対話」など

が求められている。これらの交流要望は、蘭州と秋田の交流内容と当てはまっている。以上のデータを見ると、尚更秋田市と蘭州市間の民間交流活動の必要性が感じられる。

3. インタビュー調査

以上のデータから見ると、過去蘭州と秋田の交流活動が盛んでいたことが分かった。しかし、近年になると秋田側から蘭州への派遣が減少していることも明白である。この状況が続くと、秋田と蘭州の交流事業にマイナスの影響が出ると判断し、その原因について分析を行いたいと考えている。秋田側から派遣減少の原因を探究するために、筆者は直接に交流経験のある人を訪ねたいと考えている。インタビューにより聞き出した参加者の経験を分析したうえで、今後の交流に建言するのが目的である。そのために、本稿では蘭州に向かった経験のある二人とインタビューを行った。

3.1、インタビュー対象者と選択理由

秋田林業協会会長 武田英文

武田さんは2004年から中国で緑化活動を続けて、今迄15年わたって甘粛省に26回訪問経験がある。秋田市内では蘭州に対して常人を越える深い認識の持ち主である。対象者との交流で、長年を渡って秋田と蘭州の交流の変遷を聞く。

秋田大学在校生 伊藤大致

1998年秋田県にかほ市で生まれ育ち、大学進学をきっかけに北海道へ渡る。大学三年時に蘭州大学へ留学し、中国語とMBAを学んだ。伊藤氏との交流で、しばらく蘭州で生活した一般の秋田県民の見方を聞く。

二人からインタビューと録音の許可をもらって、別々にインタビューを行った。

3.2、インタビュー方法

インタビューは半構造インタビューを行った。インタビューを行う前にいくつかの質問を準備し、インタビューをしつつ、話の流れによりほかの質問も聞いた。インタビューの前から準備した内容は以下の通りである。なお、()内は、各問を立てた理由を記載した。

1、蘭州でどんな生活を送っていましたか？

2、蘭州に対して、何か印象深いところがありますか

(秋田県民が蘭州での印象深い体験を考察し、どんなところが秋田人を引くのかを知るため)

3、蘭州にいた時、当地の人と交流した経験がありますか？それはどんな交流ですか？交流するうちに、何か気になる場所などありましたか？(今迄交流活動の効果を考察する。もし成功した経験があったらそれを参照とし将来の交流活動にも用いられると考える)

4、今コロナ肺炎が世界各国で感染拡大している状態の下で、秋田と蘭州市の交流に何かのアドバイスがありますか？（もしなかったら、オンライン交流会の発想を語り、相手の意見を聞く。）

5、2010年から2012年までの中日尖閣諸島問題についてどう思いますか？この問題は、蘭州にいた時の自分に何かの影響を与えたのか？その騒動の前後、蘭州との交流は何か変化があったか？（尖閣諸島問題が民間交流に与える影響を考察し、これから動揺する国際情勢の下でどうすれば民間交流事業の安定性を保てるのかを更に考えて検討する）

6、蘭州行く前の印象と帰った時のイメージはどうですか？行く前の印象はどこからできたのか？蘭州に行って来たらその印象についてどう思いますか（自国メディア以外の手段で相手を認識する体験の考察。メディアではなく当地に向かい交流することは、中国への認識にどれぐらい役に立つでしょうかを考える。）

7、中国に行くことを他人に教えたとき、どのような反応をもらったか？

（この問題を通して、蘭州に興味を持つ人以外の県民の見方が見えるかもしれない。そしてさらに交流を経験した県民は自分の経験をどんな風にみんなに話したのかを聞き、交流を経験した県民が自分の経験により他人の見方を影響できるかどうかを考察する）

3.3、インタビュー内容と分析

伊藤大致氏とのインタビューの中で、以下のような問題が見えてきた。なお、インタビューの全容は、P16~P28に記す

中国人との交流が少ない

蘭州でどんな生活を送ったかと聞いたら、伊藤氏は蘭州にいる一年について、「異文化を理解し、あっという間の一年」と述べた。しかし、現地の人との交流状況を聞いてみると、伊藤氏が語った「異文化理解」はほとんど留学生同士の交流を指し、現地の人との交流経験はあまりなかった。留学生の間に友人たくさんできたが、中国人の友達は数少なかった。その原因について、伊藤氏は「中国人のみんなより、留学生同士が一緒にいる時間が長いから。授業の後一緒にご飯食べて買い物して遊んで、そして同じ寮に戻る。その繰り返しだからいつもいて中国人の友達を作る時間がなかった」と述べた。同じ授業をとっているのでクラスメイトの中国人と交流した経験があるが、授業だけの時間に会えるので少しずつ関係が薄くなった。また、現地での交流かつの参加状況を聞くと、伊藤氏は、交流目的のイベントがなかったと述べたが、学習目的の西安への団体旅行の例を挙げた。しかし、参加動機は留学生のみんなと思い出を作ることであり、主な目的は交流でもなく、歴史学習だった。つまり、伊藤氏が中国にいた時、主に留学生と接触する生活環境より、日常生活で中国人と接触する機会が少なかった。そして、交流イベントも少な

かったため、伊藤氏が蘭州にいた時、あまり中国人と交流していなかったと語った。

蘭州に対する未練が薄い

伊藤氏は蘭州での生活が楽しかったと思っているが、「正直蘭州という場所が好きというよりも蘭州にいる人が好きでした」と述べた。その原因について、以下のような要素がある。まず、地域風土に慣れないことである。伊藤氏が蘭州に向かう途中で、自分がまさか砂漠に住むのかと最初疑いし驚いた。結局砂漠ではなかったが、空気が非常に乾燥していた。そして料理が辛かったり、日本人が特別に少なかったり、色んな面で蘭州の環境に慣れるために時間がかかった。

それでも、伊藤氏が中国にいる間完全に現地の人と無交流ではない。蘭州での生活で、楽しかった交流経験もあった。例えば、参加したボクシングクラブの人が自分のけがをした時は知り合いのクリニックに連絡してあげたり、風邪の薬を送ったり、帰国する時はキックボクシング用のミットもあげた。このようなところから、伊藤氏は「日本人にはないフレンドリーさ、日本人に対してとても友好的な態度を感じた」と述べた。また、日本アニメや文化を好きなどころも、伊藤氏の好感を引いた。日本語を勉強したことのない人でも、「やれやれだぜ」「ナルト、ワンピース」など言ってきた。尖閣諸島問題について、伊藤氏は「自分に何も影響はなかったし、特にそういった話題はしてこなかったです」と述べた。こう見ると、前文に述べた中国に存在した反日情緒が現在安定しているとも言えるだろう。その一方で、伊藤氏が自分が蘭州に向かうことを他人に教えた時、「どうしてアメリカやヨーロッパではなく中国に行くのかと驚かれた」の反応ももらった。本人にも「正直、並んでいる列への割り込みや声大きいなど、中国に悪いイメージを持つ人は多かった。」と述べた。以上の内容から、伊藤氏の経験から体現した秋田と蘭州の交流に影響する要素を要約すると、まずプラスの要素は蘭州市民の友好的態度と、日本アニメや文化に対する興味である。マイナスの要素は、未だ日本に存在する中国人に対するステレオタイプ、日本人が慣れ難い地域風土と、相手と接触する機会が少ないことである。これから両市の交流事業で、上述したプラスの要素に力を注ぎ、マイナスの要素を解決したり、影響を下げたりすることが重要な課題になると考える。例えば、プラスの要素において、蘭州市民の友好的な態度を、ビデオ映像に作って相手にアピールする。または、蘭州でアニメグッズと日本伝統的な記念品の販売を行う。マイナス要素においては、日本人の考え方と価値観の違いを宣伝し、相手に理解してもらうことが重要だと考える。また、蘭州ならではの異国趣味を宣伝するのも重要だが、これから、日本人の飲食習慣と合わせて、現地料理の改善がポイントになると考える。

最後に、将来或は今の時期の秋田と蘭州の交流事業は建言につて、伊藤氏は「なかなか難しい」と考えながら、秋田のラーメン屋に蘭州で出店することを提言した。その後、筆者の考えた「オンライン交流会」の提言について、伊藤氏は悲観的な態度をとった。本人がオンライン授業での感覚だったが、「対面ではないと話が盛り上がらない」と述べた。つまり、スクリーンを対象として交流の雰囲気を作り難いという考えだった。

以下では、武田英文氏へのインタビュー分析を考察する。

政治的問題の影響

武田氏との話によると、2012年、尖閣諸島問題が発酵している最中に、もともと蘭州の草原林業局と秋田の農林水産部の友好提携が秋田で行う予定があった。しかし、不明な原因で、蘭州側の人達は一年中二回も来られなくなったというメッセージが来た。秋田側から来られない原因についても尋ねたが、蘭州側からただ「事情があって」「準備が間に合わなかった」「トップが変わったから」など不明確な理由しか返さなかった。当時友好提携を提言した武田氏にも、蘭州側の人々が来られなくなった原因が分からなかった。しかし、今から振り返ってみると、おそらく尖閣諸島問題の影響があると疑うようになった。「提携するのが伸びたのは本当に尖閣諸島の問題なのかどうかはわかりません。別の原因があるかも知れません。ただ、その影響も少しあると思います。中国政府、甘粛省のみんなやっぱりそういうの気にしなければいけませんので、多分中国の場合は日本以上に気にしていると思う」と武田氏が述べた。筆者が尖閣諸島による反日潮流を経験した中国人として、「そういうの気にしなければいけません」という言い方を認める。むしろ筆者に驚きを感じたのは、武田氏が述べた「30周年の時、みんなイベントに参加して、別にやめようという話はなかった」とのことだった。また、30周年式典が延期されたのは本当に尖閣諸島問題の影響なのかどうか、武田氏は疑いの態度を示した。こう見ると、尖閣諸島問題に対して、蘭州側は秋田側より交流活動が影響されていると考えられる。同一の問題に対し、蘭州側は沢山の面と関係づけ、影響を防いでいるが、秋田側は予定どおりに活動を行うのが良いという考え方の違いが見えてくる。また似たような問題が発生すると、対応方法を考えるうちに、このような両地の考え方の違いを考慮の中に入れた方がいいと考える。

蘭州の文化的な面が魅力的である

武田氏との話によると、蘭州は秋田であまり人に知られていないようだ。知っている人は、「秋田蘭州会」に入会している極一部の人で、他の人にはあまり知られていないと考えられている。その原因について、多様な提携対象の併存と、中国に対する総体的なイメージが武田氏に提起された。それに対して、蘭州の文化的な面の魅力も近年日本に発見されている。蘭州の食文化で代表的な「牛肉麺」の店が東京でもできている。また甘粛省を舞台とする「乙嫁語り」など日本の若者の間で人気が出ている。また、古代シルクロードと関わる伝統的な文化など、日本の年配上の人たちや、歴史に興味を持つ人たちの間に人気があるようだ。こう見ると、蘭州は文化面でとてもポテンシャルがあると考えられる。

そして、今後蘭州と秋田の交流事業への提言について、武田氏は親しみを持ちながら、シルクロードのような、日本人が覚えやすいところ、あと交流しやすいところを作った方がいいと考えている。そして、筆者の考えた「オンライン交流会」について、賛成の意見を持った。さらに、「オンラインで全部やるのではなく、それをスタートとして、きっかけとして、相手に対する興味を持たせる。それから次の段階で実際に行ってみようとなる」と建言した。でも、それとともに、「若い人たちはいいけど、ある年齢以上の人だとちょっとピンとこないかも知れない」と新しい問題を指摘してくれた。

4. 結論

姉妹都市関係は、秋田と蘭州の間に促進の機能を発揮している。しかし、尖閣諸島を代表とする国間の問題により、2009年から今までの秋田と蘭州の交流はマイナスの影響を受けている。伊藤氏と武田氏のインタビュー内容によると、蘭州の地域風土は、芸術的な面で日本人を惹いているが、日本の風土と大きな違いがあるため、文化体験以外の目的を持つ日本人には慣れがたいことになっている。また、文化の違いを克服し蘭州に向かったとしても、生活習慣で現地の人と接触していないし、交流イベントも少ないため、交流をあまり経験せず帰った人もいる。そして、同一の国際問題に対して、立場の違いによる見方の違いもある。そうなった場合、良し悪しの考え方を捨て、相手の考え方を知った上で理解することが大事である。今後の交流に関して、どんな面で交流を行うべきか、どうすれば日本人も心地良く体験できる環境を作るのか、またどんな方法で国間の問題に対応すべきなのかは今後の課題となる。

今まで秋田と蘭州の交流活動を見ると、姉妹都市関係は、両市の多様な面で促進の機能を発揮していることが分かる。しかし、姉妹都市間の交流活動はいつでも同じようなものではなく、国際関係や、発展の度合いなどに合わせて、決めるものだと考える。それらの要素の中で、相手の都市に求められているものと、自分の都市の特長が一番シンプルな要素である。なので、これから秋田と蘭州の交流活動内容も、互いの欠けているものと長所を常に意識しながら決めべきだと考えられる。また、姉妹都市間の活動は外的な要素からも影響を受ける。特に両国の間に軋轢があった場合、一般市民に対する友好的な態度と、相手の見方を理解することが重要になる。自分の視点だけで相手の行動を考えてしまうと、理解できなかつたり怒りを感じたりして、一般市民の間に更なる深い誤解が生じる恐れがある。

今後の交流事業について、以下のような建言をしたい。これから秋田と蘭州の交流に使うWEBサイトの運営をスタートし、ネット交流会の準備を提案したい。「ネット交流会」は、一般交流会を支援する活動として、相手都市を知らない、興味を持たない一般市民に、相手都市の異なるところと素晴らしいところを紹介し、興味を起すのが目的である。「ネット交流会」の設置を

スタートとし、今後更なる成熟な姉妹都市交流システムの作成を図る。

添付

同意書

この度は、蘭州と秋田姉妹都市関係についてのインタビューにご協力くださり、ありがとうございます。このインタビューは秋田大学の文部科学省の日本語文化研究修正が行っているものです。インタビューによって、蘭州と秋田間の交流体験を尋ねたいと思っています。

研究にご協力いただける場合、インタビューをスマートフォンを用いて、音声に収録させていただきたいと思っています。音声ファイルを文字化した資料を論文・研究発表などで用いて、完成した論文は秋田大学のホームページに掲載させていただきたいと思っています。

インタビュー内容

インタビュー対象:伊藤大致

インタビュー場所:オンライン

インタビュー日時:8月4日

長さ:23分

筆者:蘭州でどんな生活を送っていましたか?

伊藤:1年間蘭州大学で平日に中国語、週末にMBAを勉強していました。留学生が1000人おり世界中のさまざまな国と地域の留学生と交流し、一緒にご飯を食べたり、遊んだりするのはさることながら他にも互いの文化を理解し合い、違いを尊重する経験もできました。さらに留学生1000人のうち日本人は私一人だったため毎日中国語か英語、さらにロシア語圏の国から来た友人が多かったため時々ロシア語を使う生活をしていました。あっという間の1年間だったと思います。

筆者:今、蘭州にいた時ほかの人と文化を理解し合う経験もできたって話があったが、蘭州にいた時、たくさんの友達出来ましたか?大体どこの人ですか?

伊藤:たっくさんできましたよ。その中で一番仲がいいのは韓国とカザフスタンの人。

筆者:では中国人の方はどうですか?

伊藤:中国人の友達あんまり作れなかったな。いつも留学生と一緒にいるから。

筆者:それは何かの原因がありますか?言葉とか、環境とか。

伊藤:ただ自分が留学生と過ごしすぎました。授業のあと一緒にご飯食べて買い物して遊んで、そして同じ寮に戻る。その繰り返しだからいつも一緒にいて中国人の友達を作る時間がなかった。

筆者:なるほど。わたしも今留学中で日本人より留学生のみんなと多く接触しているような感じがしますね。

伊藤: まあそういう理由で中国人の仲良い友達はつくれなかったです。

筆者:蘭州に対して、何か印象深いところがありますか

伊藤:料理が辛かった。住んでいた小樽市よりも栄えている。ムスリムが多い。クラブが楽しい。日本人が特別少なかった。上海や北京、天津などは日本人の留学生がたくさんいてそこに住む日本人も同じくたくさんいるのだと思うが、蘭州にいる留学生は全体で、人くらいに住む人も十数人くらいしかいなかったのので、留学をして中国語を上達させるという目的でいる人にはとても合った環境だと思う。

筆者:蘭州にいた時、現地の人と交流した経験がありますか?それはどんな交流ですか?交流するうちに、何か気になる場所などありますか?

伊藤:MBAのクラスメイトが私以外皆中国人だったので彼らと交流しました。また、ボクシングジムに通っていたのでジムに通っている仲間たちと交流もしました。MBAのクラスメイトはみんな最初は温かく接してくれますが、少しずつ関わりが薄くなりました。一方でボクシングジムの仲間はずっと親切で楽しく交流しました。僕が怪我をした時は知り合いのクリニックに連絡をしてくれたり、風邪をひいたら薬をくれたり、帰国するときはキックボクシング用のミットをくれました。

筆者:MBAのみんなと何故関係が薄くなったのか?

伊藤:そうだな。なんか授業だけの関係でした。

筆者:じゃ、別に個人の経験じゃなくてもいいが、蘭州にいた時、何かの交流イベントに参加しましたか?農家民泊のような。

伊藤:西安への団体旅行があった。電車で西安に行って泊日して兵馬俑をみたりイスラム教徒の料理を食べられるストリートでご飯を食べたりして、最後にプレゼンをする。

筆者:感想はどうですか?

伊藤:正直歴史の話とか頭に残ってない。留学生の友達と思い出作るために参加したから、正直建物の歴史は気にしてなかった。

筆者:じゃそのイベントに何か提言がありますか?こうやればもっと楽しくなれるみたいな

伊藤:これをやればもっと楽しいか。なんだろう、十分楽しかったけどな。西安に行く目的は楽しいではなく歴史の勉強だから、楽しいことを重視する必要はないと思う。

筆者:なるほど。学習のためのイベントか。別になんか、現地の人との交流するためのイベントってなかったかな?

伊藤:そうそう。なかったな。

筆者:今コロナ肺炎が世界各国で感染拡大している状態の下で、秋田と蘭州市の交流に何かのアドバイスがありますか？

伊藤:秋田には高齢者が多いので直接秋田に来て交流するといったことはしない方が適切だと思います。蘭州に秋田で有名なラーメン鷹島のラーメンを期間限定でもいいので出店してみてもいいでしょうか。

筆者:年から年までの中日尖閣諸島問題についてどう思いますか？この問題は、蘭州にいた時の自分に何かの影響を与えたのか？その騒動の前後、蘭州との交流は何か変化があったか？

伊藤:何も影響はなかったですし、特にそういった話題はしてこなかったです。

筆者:蘭州行く前の印象と帰った時のイメージはどうですか？行く前の印象はどこからできたのか？蘭州に行って来たらその印象についてどう思いますか

伊藤:蘭州に行く前は友人から田舎だと言われたので秋田市よりも田舎で緑の広がる農村地帯なのだろうと想像していました。蘭州行きの飛行機で隣に座った人が蘭州の学生だったので彼らに話を聞くと yuzhong なら何もない、benbu ならショッピングモールなどがたくさんあると言われたので yuzhong じゃない方に住みたいと思いました。さらに飛行機から蘭州を見ると想像していた緑とは真逆の一面砂漠のように薄い茶色が広がっていたので俺は砂漠に住むのかとびっくりしました。実際住んでみると空気は乾燥していましたが、砂漠ではありませんでした。帰った後のイメージはまた帰ってきたいと強く思いました。正直蘭州という場所が好きというよりも蘭州にいる人が好きでした。留学生も。

筆者:蘭州の人が好きって、どういうところが好きですか？

伊藤:日本人にはないフレンドリーさ、日本人に対してとても友好的なところや日本のアニメや文化を好きなおところ。日本人だということ 「だってばよ、しね、やれやれだぜ」か言ってきた。ナルト！ワンピース！とか言ってきた。

筆者:中国に行くことを他人に教えたとき、どのような反応をもらったか？

伊藤:どうしてアメリカやヨーロッパではなく中国に行くのかと驚かれました。正直にいうと、悪いイメージを持つ人が多かったです。

筆者:悪いイメージって、例えばどんなイメージ？

伊藤:並んでいる列への割り込み、声が大きいか

筆者:さっき伊藤さんにもアドバイスを聞いたのですが、実は自分も考えを持って。もし、今のオンライン授業みたいに、ネットで秋田と蘭州のオンライン交流会があった

らどう思いますか？

伊藤：うまくいかないと思う。ズームで授業して感じるんだけど、話にくいし、話がなかなか盛り上がらない。

筆者：つまり、対面する時のような雰囲気を作り難いってことか？

伊藤：そういうこと。

インタビュー対象:武田英文氏

インタビュー場所:二ツ井駅の喫茶店

インタビュー日時:年月日

長さ: 分

筆者：蘭州との、自分がネットで調べたところ、年もわたって、武田さんは蘭州で…

武田：そう、年が最初。

筆者：活動しているんですけど、最初はどのようにして蘭州に行こうと思いましたが？

武田：私もともと林業っていう、あの、大学の時の、しかも造林と言って木を植える。林業にもいろいろあるんですよ林業経済学とか、いろいろ林政学という林業のポリティカルというとか、あとマネジメントやるとか、いろいろあるんですけど、私は植えるという、林を育てるとというのが、大学の専門で。日本はもうあちこち木をいっぱいたくさん植えて、もう植えなくても、植えた木を如何に育てようかというような事態になってる、日本が。でも、私はもともとこういう木をないところに植えたいという専門をやっていたのでいつか、外国に植えたいなあ、木の少ないところに。中国には限らないですけど、行きたいなとずっと思ったんですよ。でも、なかなかチャンスがなかったんですが、蘭州と秋田県は友好交流してますよね。そして確か、ね、周年、交流を初めて二十周年の時蘭州から蘭州の庁の関係の人が秋田に来たんですよ。来た時に、やあ実は私、木を植えたいとちょっと話をしたんですよ。そうしたら、ぜひやってくれと、こういうことだったんですよ。でもその時私は、植えるにはお金も必要だし、その時まだはっきりしてなかった。植えたいと思ったけど、実際になる時にそういうお金のことも考えなくてはいけなかったので。でもあのう、蘭州から来た人が私のうちに来て、ぜひ木を植えたい、という話で、私も植えたいしじゃ一緒にやりましょうということにはなったんですけど、じゃどうやろうかということで、いろいろ考えたんですが、その時に、日中緑化交流基金という一般に応募地基金と言われてる、XXXさんという方が、中国との友好を促進するために、金をためてそのお金を使って、政府じゃなくて民間が中国に木を植える。それを援助しましょうという制度があって、それで私もやりたいと手を挙げたんですよ。

筆者：だから、周年の交流をきっかけに…

武田：この時に、秋田に来た時にちょっとあのう色んな何というの懇親会というかやった時に、私は一回招かれていて、こう色々話してる中で、やあ木を植えたいとつったら、ぜひやってください、やりましょうという話になって、それが周年の時に来た。それで、でも、お金どうしようとか考えて、でもそれがそれ日中緑化交流基金というところにそういうところがあって、民間にお金を出してるの分かったので、そっちの方に働きかけて、こういうやりたいと、その時に計画をたてる時に蘭州の、甘肅省のみんなにこんなことでやりたいともらって、それにまた私の考えとかを入れて、こんなことがやりたいから、基金を出してほしいということでお願いしたら、それが通って、それが年です。八百万円ぐらいもらうことができ、それでやりましょうとやりだしたのは、最初です。それがずっと続いて、日中緑化交流基金っていうのは、今かね全部使っちゃって、今もうなくなったんですけど、去年からなくなっただの。でも年から年間年間か、お金をもらってずっと続けてきたんですよ。それが途中で敦煌とか天水とかに木を植えたんですけど、敦煌がイオン環境財団が、イオン、そのスーパーマーケットの、あそこが、やっぱりそういう民間で、海外でこういう植林するのにお金を出してくれてるんですよ。計画書出して認めれば。それで最初敦煌行って、その時には蘭州行こう、日中緑化交流基金のことで言ったので、その時敦煌にも飛んで、敦煌のそういう林業局という当時林業局というところがあって、そこに一緒に木を植えましょうという話をしたら、ぜひやってくれたいという話が合って、その計画をイオンに持っていったらイオンで、これならOKですよとお金を出してくれて、それで敦煌ではイオンでずっとここまで年ぐらいなかな。ずっとイオンからお金を出してくれて、これ今もやってます。天水は緑の募金って知ってるかな緑のはね。緑化、緑の人とかがあって、それお金を国民が、すごいお金を出して、緑を増やしましょうという活動をやっていて、そこがその海外の事業でもお金を出すということで、このそこにも手を挙げて、天水でこういうことやりたいって言ったら、それが通って、これで蘭州と、敦煌、天水三か所ですと今俺やってきた。

筆者：こういう風にやってきましたか。では、武田さんが蘭州に行ったときに、この年間ぐらいの間に、秋田市と蘭州市の交流活動に参加したことがありますか？

武田：あります。

筆者：例えばどんな活動がありましたか？

武田：あのう、甘肅省の省と県、そして蘭州市と秋田市が友好提携しているですよ、お互いに。それで、同じ年に、友好提携がスタートしてるので、秋田市と蘭州市の例えば二十周年と言うと、秋田と蘭州の二十周年も一緒なんですよ。同じ年にスタートしてるから、だから、例えばその二十周年で、蘭州からお客さんというか、がく

ると当然その市の方で参加するので、それで一緒にそういうのやったりとか、あの今のそういうさたけさんという、秋田県の知事は、前、秋田市の市長だったんです。県知事になる前に。それで、その市長のときに、蘭州に行って、いろんな交流をしたんですよ。まあそういうことで、市と県がそういうのがあって、秋田と蘭州が交流するということで、ずっとやってきたので。私も二十周年のときにスタートしたんですが、三十周年のときに行きました向こうへ。それで三十五周年のとき、大体年とか、十年とか大体節目になるので、そのときにこっちから行くときに私も、まあ、一緒にこうやってということで、向こうで交流しましたし。あと、その間に敦煌、蘭州からなんか演劇団が来たんですよ。なんと言うっけ、敦煌...まあそういうところに一緒に行こうと、見に行ったりとか。

筆者： じゃ、武田さんは蘭州に対して、何か、印象深いところがありますか？

武田： 印象深いところか.....まあ、年々、街が、新しくなっている、きれいになるし。今は昔にはなかった、地下鉄もできてるし。昔、自転車が多かったですけど今車が多くなったり、そういう街が変化してるところを感じますね。女性の服装も、今のも日本も例えばアメリカも、中国もあんまり変わらない格好してるし、もう早いスピードで、進歩してるというか、あと例えば高速道路がどんどんできたりとか、こういうのは日本も、なんかスピードが全然違うので、まあそれが非常に、まあ行くたびに感じますし。ただまあ木を植えることに関しては、まあずっと、木を植えるってつっても、我々が直接やるのじゃなく、蘭州の人がどんどんやってますので、本当に、私達植林したと言っても、まあ実際甘粛省と蘭州は実際木を植えているわけですので、まあ、それがどんどん進んで、それが一緒にやったり、どんどん親しみを感じてるし、俺たちいつも、ここは第の故郷だと言ってます。蘭州と。まあ、実際そう思います。蘭州ラーメンも、いつも食べたいと思ってるし 笑 行くたびに食べるし。

筆者： そういえば、やっぱ武田さんは日本人として、異国にある中国蘭州に行った時、何にか慣れてないこととか感じましたか？

武田： まあ、異国って言ったら異国です。例えば、空気も乾燥してるし。まあ、日本にはなかなかない例えば、モスク、イスラム教のその、丸くてそういう風景は日本じゃ、目にしないので。ってそういうのを目にしたりという感じではやっぱり異国だと思いますし。まあ、黄河流れてますけど、日本だと川がきれいって、あそこの方は全く、泥川みたいな感じで、あれはやっぱりある意味、異国と感じますね。日本の川だと、今日雨だから濁ってますけど、普段はきれいですので、我々に川の水なんて飲めるっていう認識がありますけど、黄河の水だと、喉が乾いても飲もうとは.....まあ、そういう点、まあ異国っていうのを感じますし。まあ後食べ物も違

いますけど、まあ美味しいので、そう違和感っていうか、あんまりそれは感じませんねこれ。ちょっと食べれないとも思わないし。あそこの羊の肉もとても美味しいので、日本では食べれないぐらい美味しいので、食べ物は本当に合ってる、好きですね。だから、今はちょっと行けなくて残念ですけど。 笑

筆者：ならばじゃ今度、コロナが安定したらぜひ、また来て食べてください。 笑

武田： だから、ぜひ行きたいと思ってますけど。あと木を植えに行ってる間に、いろんな蘭州にいる秋田の人が来たとか、けっこうありますよね。私も甘肅秋田会を作ってますで、それで.....あ、去年のあのテレビ見た?蘭州を写した。

筆者： あ、確かアイドルさん一人がやっていた.....

武田： そうそうそう、生駒さんっていう人

筆者： あ、思い出しました。生駒さんですね。蘭州に行って、その番組を作って、私も見ました、あの番組。

武田： そのときに、甘肅秋田会の会長も写ったけど。

筆者： はい、覚えてます。映ってました。

武田： 彼なんだっけ、ちょうさんか、ちょう会長

筆者： そういえば、去年色々イベントとかあったけど、今年はちょっと色々あって、交流に不便ですね。特にコロナが

武田： 不便ですね。

筆者： じゃ、あのう、今のような状況で、秋田と蘭州の交流について、武田さんは、何かアドバイスとか、提言とかありますか?

武田： まあ、アドバイス.....やはり、多くの人と、例えば秋田、蘭州と甘肅省の人が、数多く交流できれば、しかも多く広がっていくので、その民間サイドでね。やっぱり例えば、国と国では、まあ、また問題があるとか、あります。まあ、それはどこの国もそうです。でも、それはそれとしても、国民同士はこう色々含めてるから、そういう両国の関係を良くするとか。これから半年ぐらいの交流が厳しそうなので、やっぱり交流したい。これできたらいいなと。ただ日本では非常にあのう、シルクロードという、日本人のロマンを描きかけるところがあって、大変人気あります。特に年配上の人の間にシルクロードに惹かれているひとかいるので、甘肅省はずっとシルクロードを通ってて、特に敦煌というところ有名なんで、敦煌行きたい人いっぱいいます。今度一緒に行こうと誘ってるんですけど、木をうえに一緒に行って、そして敦煌、どこかでずっと木を植えているので、色々案内してくれるので。そういえば、まあ、親しみを持ってるといって、シルクロードの後で、日本人が覚えやすいところとか、そういうアニメなど交流し安いところかな。まあ、一応、内陸でちょっと遠いのは難しく。

筆者： あ、なるほど。中国のシルクロードって日本の年配上の人たちの間に人気があるのですか。

武田： はい、非常に人気あります。

筆者： では他に、若者のあいだに、こういう蘭州と関わっている人気のあるものとかありますか？

武田(息子に)：なんか、日本の若者で甘肅省の面白いものとか？

武田(息子)：蘭州で面白いものと言ったらやっぱり牛肉ラーメンが人気ありますね。今東京にもいくつかの店があって、蘭州と言ったら「あ、牛肉麵」と言う人もいるので、やっぱりそういう食の面はとていいと思います。あとやっぱり、若い人と言っても歴史が好きな人もいますので、そう言うので、シルクロードとか、あと日本のアニメや漫画にも、蘭州じゃないけど、あの辺りを舞台にした「お強め語り」とか知らないですか？後、ちょっと有名な漫画があるので、そういうのが好きな人とかが興味を持っていると思います。後「西遊記」とか、私から見るととても魅力のある地域だと思う。後、中国の歴史とか史記が好きな人とか、そういう人にはとても魅力的な場所だと思います。

筆者：つまり、食の面と歴史の面は割と秋田の、日本の若者たちの注目を集めているということですね。

武田(息子)：そうだと思います。

筆者： ええと、蘭州の市民に、秋田のことを言ってみたら、「あ、秋田、蘭州の姉妹都市ですね」という反応がもらえるんですけど、秋田県ではこういうのはどうですかね

武田：多分あんまり知らないと思います。秋田ではね、日中友好協会って言う組織があるけど、その会員だとみんな知ってると思いますけど、一般の人はあんまり知らないと思う。

筆者：ああ、知らないのですか... あ、因みに、自分が資料とかで調べたところ、昔から蘭州と秋田の交流活動は盛んでいたのですが、ちょっと年以降かな、蘭州からはまだ交流員の派遣とかまだあるんですけど、秋田の方からの交流は一気に減ってますね。この間県庁へ資料をもらいに行った時は、少しだけそこの人と話ができましたが、「それは何故ですか」と聞いてみたら、相手は「やっぱりみんな自分の仕事もあるんで、そして中国に対してイメージが良かったり悪かったりするわけもあるんで、そうなっていると聞いてますけど。って、さっき武田さんの話を聞いて、もしかすると、みんな元々蘭州の存在さえ知らなくて、別にこのような交流機会があるとは、そもそも知らないんじゃないですかと、思うんですね。

武田： うん、まあ、広く県民に知られているかというと、やっぱりあんまり知らない。

筆者：そうですね、なんか、情報が一部の人に限っているような。

武田:それに、ほら、秋田県は海外の姉妹都市とか友好提携とか、一番古いのは蘭州だけど、甘肅省だけど、やっぱり他の国とも友好提携をやってるし、そして、中国に対するイメージの問題とかもあるし、そして、国家間の問題とか、尖閣諸島の問題もそうだし、やっぱりそういうことがあったとまたちょっと中国に対するイメージが悪くなったりとか、やっぱりそういうのも色々変化してるので。

筆者:色々ありますね。あ、今尖閣諸島のことをおっしゃったのですが、確か尖閣諸島は年ごろから年までぐらいにあった問題で、そして武田さんは何年間も続けて秋田と蘭州の交流活動に参加しているので、ここではちょっと聞きたいですが、やはり尖閣諸島のことは両市の交流に何か、影響がありますか？

武田:あのう、はっきり、目に見える違いはなかったんですけど、ちょっと振り替えてみると(笑)あのう、一昨年かな、秋田の農林水産部が、今の草原林業局と友好提起しようということがあって、年前、年の時かな、わたしがちょっと中国の林業局と友好提起したいと話をされて、じゃやりましょうということで、それで秋田の県庁に話したら、いいことだってことになって。本当は年の時かな、提起しようという話になったんですよ。そして、そういうのを組もうという話になって、ご存知だと思いますけど、日本では事前に予算をちゃんと取ってないと言う活動なかなかできないんですよ。そのためにもうちゃんと準備して、中国のみんなのために予算をとってました。ところが向こうからは急に来られなくなって、それで、予算が使えないから浮いちゃうじゃないんですか、それで役所にはまあいいことじゃないんですよ。それで、一回ダメになって、そのあと月だったかな、また来るということになって、その時また予算を取ったんですよ。それも来なかった。それもまた流れて、その時は理由がわからなかった。

筆者:あれ、向こうから説明とかありませんでしたか？

武田:まあ、いろんな事情ということで、はっきりした理由はないということで、あといろんな事情とか、準備が間に合わないとか、あとトップが変わるとか、伸ばしたいとか

筆者:あれ、トップが変わるって？

武田:例えば省長とか、林業局の局長かな。まあ、伸びたんですけど、それが一昨年やっとならけど、今から思えばね、やっぱりあれは、ちょっと尖閣諸島の問題が起こってきちゃったので、やっぱりその辺の影響が、その時今出たのでかなと思います。秋田側には特には「じゃ県庁も同じことをやり合おう」そういうことではないので、秋田県側にはあまり関係はなかったけど、中国からは来る来るって二回も伸びたっていうのはやっぱりそういう影響、ややそういうでは、若干交流を停滞した、のかなと思います当時、でもそうだとはいまだ別に結んだので、まあ良かったんですけど。

筆者:あ、確か話が始まったばかりの時、武田さんは周年、周年のイベントに参加していると言ったのですが、周年の時のことまだ覚えていますか？

武田:覚えてますよ。

筆者:確か周年の時は、尖閣諸島の問題が一番ひどい時になったが

武田:あ、そう、あでも秋田県ではその時副知事がいた、そして当時の市長もいた、でもその時は尖閣諸島の問題があるのでやめようという話はなかった。それで、わたしが木を植えるところに行って、みんなと木を植えたのですが、その時は別に、やめようという話はなかった。

筆者:また自分の調べたところなんですけど、データの方で、周年の時は、日本での反中情緒が一番高まっていた時期なので、ちょうどその時に、二回延期された周年式典が開催されたので、その時どうなったのだろうととても気になっていて。

武田:ただ、その、提起するのが伸びたのは本当に尖閣諸島の問題なのかどうかはわかりません。別の原因があったかもしれない、それはわからない。もっと別の原因があるかもしれない。ただ、その影響も少しあるのかなと思っているわたし。中国政府、甘粛省のみんなやっぱそういうの気にしなければなりませんので、多分中国の場合は、日本以上に気にしてるので、まあ、国の色々体制があるし、多分そっちの原因があるのかなと思ったけど、でも本当はどうなのかわたしはわからない。

筆者:なるほど、まあ、一体何故なのかそれを言った本人にしか分かりませんね。あ、ちょっと次の質問に進もうかな。武田さんは中国に行ってきた、中国に行ってきたことを周りの人に教えた時、どんな反応をもらいましたか？

武田:こういうことで、まず植林している人はまあ、あちこちで、最近はどうあんまりやりませんが、やっぱり、みんな関心を持って、どういうことやってるとあちこちに呼ばれて、こう、パワーポイント使ったりして、色々あちこちで説明してきたので、山の内にこういうスプリンクラーをこんなに使うのは日本じゃ考えられないので、みんなびっくりして、よくこんなところでやってるなって。(少しの沈黙)やっぱり日本では、その、あんまりやっぱり甘粛省とかを知っても、中国も大きいこともあって、上海とか北京とかそういうところを言ったらすぐ分かるんですけど、蘭州と言ったらやっぱり、知っている人は少ない。後分かる人は、ええと、西安とか日本にはわかるんですけど、蘭州と言ったらやっぱり。

筆者:やっぱり日本では存在感の薄いところですかね。って、あ、う、自分が中国に行ってきたとのことを他の人に行った時、「どうして中国？」とかの反応はなかったのですか？

武田:まあ、最初から木を植えに行くって

みんなに言ってるから、あんまりはなかったんですけど、やっぱり木を植えるには金が必要

なので、なんで中国に金を持っていくのかと言った人がいました。まあ、行けるところはいっぱいあるんだろう、なんで中国にお金を持って行くんだと一人いましたし、中国はもう近年どんどん発展して、GDPも日本を超えて、なんで中国に.....と言ってる人は、まあ今もいますけど、でも、まあそれに対しては、環境のことは国だけの問題じゃなくて地球全体の問題なので、ということをお話しますとみんな「そうだな」となりますね。

筆者:やっぱりそういうのは、ちょっと避けられないのなけ。あ、なんかさっきも言ったアドバイスのことですけど、自分もちょっと考えてみて、ちょっと一つの提言を考えたが、もし、現実的に対面して交流するのではなく、オンラインで会ったり話したり、自分の現地の文化を消化したりするのは、それはどうでしょうか？

武田:そういうのはいいことだと思う。ただ、オンラインだと、ただ若い人はいいけど、あるほら年齢以上の人に、中国にシルクロードとかに関心持ってる人とか、そういう人に多分ネットとかだと、ちょっとピンと来ないとか、あるかもしれません。でも、こういう事態になれば、やっぱり交流も必要じゃないんですか。そういう仕組みをやるべきだと思う。

筆者:もしそういう仕組みができたなら、多分今コロナのような時期に限らず、日常的にも交流の機会が増えているじゃないんですかとじぶんはそう思っています。

武田:それはいいアイデアと思います。特に今の若者たちにはそういうのは慣れているから色々できると思う。ちょっとやってほしい、ちょっと我々にはなかなか出てこないと思います。

筆者:あ、でも、前のインタビュー対象の人に今の提言を言ったら、相手はネットだけで、おそらくみんな盛り上がらないというのがあって

武田:そういうのもあるけど、最初の頃、例えば、印象、甘肅省はこんなところですよと、映像で見せることによって、甘肅省とか蘭州に興味を持つ方がいると思うので、関心を持つ人は実際に行ってみようになって、次の段階では、だから最初の始まり、スタートとしてはいいんじゃないんですかと。それが全部の交流じゃなくて、それを、なんていうの、最初のスタートになって、それから実際に行ってみようということになるので、それもいいと思いますね。

筆者:なるほど、ネットでの最初の接触を踏み台として、これをきっかけにこれ以上もう一步の交流を求めるような感じですね。

武田:そうそうそう、前に見せた、あのう、白神山地の写真とか、なかなか甘肅省とか蘭州にはない風景なので、皆さんは非常に関心を持つと思いますので。日本ではああいう砂漠みたいなないので、やっぱり互いのこういう異国って感じですので、一緒に交流すれば、互いのそういうものの初耳にはなると思う。だからそういうのはぜ

ひ、やってください(笑)

筆者:(笑)はい、では、今日ありがとうございました。

参考文献

- 一、 秋田市「交流の経緯」「主な交流(蘭州市)」更新日 2020年1月31日 閲覧日 2020年 7 月
<https://www.city.akita.lg.jp/shisei/kokusaikoryu/1003625/1010187/1003112.html>
- 二、 言論 NPO 「第五回日中共同世論調査」2009年8月26日 閲覧日 2020年7月
<https://www.genron-npo.net/world/archives/6489.htm>
- 三、 言論 NPO 日本国民の中国へのイメージ形成が「生活感覚中心」から「尖閣」に移り始めてきた～「第七回日中共同世論調査」2011年8月11日 閲覧日 2020年7月
<http://www.genron-npo.net/world/archives/4165.html>
- 四、 言論 NPO 両国民の相手国に対する感情や認識は、この一年間で全面的に悪化し、過去9回の調査で最悪の状況～「第9回日中共同世論調査」結果～2013年8月5日 閲覧日 2020年7月 <http://www.genron-npo.net/world/archives/4911.html>
- 五、 言論 NPO 中国人の日本に対する良い印象は、過去最高を更新 第15回日中共同世論調査結果 2019年10月23日 閲覧日 2020年7月 <http://www.genron-npo.net/world/archives/7379.html>
- 六、 南村志郎 「日中地域間交流のあゆみと展望」「自治体国際化フォーラム」{281号}自治体国際化協会 2013年3月{6ページ}
<http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/articles/index-281.html>
- 七、 豊田哲也「姉妹都市提携の変容と展望」アジア地域研究連携機構研究紀要 2(0), 9-22, 2016年10ページ <https://ci.nii.ac.jp/naid/110010032952>
- 八、 豊田哲也「姉妹都市提携の変容と展望」アジア地域研究連携機構研究紀要 2(0), 9-22, 2016 {10ページ}